

実録：100年前の姫塚発掘（2）

・・・前回の続き

「昨日今西学士の叫んだ所へ往って見ると、三浦先生が人夫を督して霜柱をサクサクと掃かせていらっしゃる所で、碩学一行も既に来てられる。風は吹かずそう凍えもしないのは神慮のほどの畏くありがたし。美しい^{あさひ}旭が上って、紅葉黄葉の栄えめでたく、午前10時ごろには小春日ののどかに、牛叱る農夫の声さえ厭には聞こえぬ。

僕の観たのはやはり姫塚だが、昨日、人夫の鍬の先の触れたため、^{ほとぎ}提瓶の半面を砕いた誤りに懲りてか、今西学士も大事を取って、容易に手を進めず。黑板博士は外套を脱ぎ上衣を脱ぎ、カブスを土だらけにして、土の中に膝折り敷きの両手で掻き出すやら、起って力限り掘り返していたが、『どうもシャベルるのは仕よいが、シャベルを使って掘るのは^{ひど}酷いね』と呼吸もきれぎれになる。喜田博士〔京都帝大・41歳〕もマントと羽織を投げ出して、移植ごてで土を崩す。濱田学士も坂口教授も柴田学士も時々来て加勢をする。そのうちに長剣一口と提瓶1個をはじめ、管玉・切子玉・瑠璃玉を幾つとなく得て、一行の歓び一方ならず、人夫も『万歳万歳』を内々で唱える優しさ殊勝さ。

なおこの辺に何物かあるという見込みらしく、黑板博士はムダロを利かなくなり、我を忘れ、周囲の人を忘れ、塚の外なる世界をも忘れたふう^{ふう}に掘りまわしていたが、三浦先生が『提瓶があれば蓋物のような土器があるはずだよ』と言われるに応じて『そう、いくら酒好きの御方であっても酒ばかりじゃ往くまいからね』と言うその言下に『出た出た、蓋物が出た』と聞く嬉しさ。すると小言奉行の三浦先生が『静かに静かに』とやり出して『割らんようお願い申します』で一同が笑い出す。

傍観生もだんだん“古墳通”になって博士らに対してひとかど承知顔で説明をするのもあれば、盛んに“逆講演”をやるのもあるが、なかんずく新坂君の主張が面白い。それは徳北の農家や高岡地方では、^{たまや}靈舎に死人の好きなものを^{えが}絵く慣習がある、例えば、酒好きには徳利を^か絵き、煙草好きには煙草入れを^{えが}絵く。これは実物を入れる代わりだというのである。なるほど殉死に替える埴輪みたようなもので、一は経済問題、他は人情問題だなどと“逆”の“逆”をやるものもあつたが、黑板博士が『君らの解釈の方がうまいよ』でまたまた大笑い。

笑っているうちに、また蓋物が並んで出る『やっ、出た』と言うほどもなく『また出たぞ』と言う。博士の帽子もシャツも泥まみれ。そしてその^{あたり}周辺には例の瑠璃玉や、切子玉や、水晶玉が続々と数知れず出る。出たといえば、県庁の江藤君がすぐ見取り図を作り、記録は紫洞君がノートに収め、実物は僕が萌黄の袋で受けるのだが、喜田博士は口が悪いので、それに“乞食袋”という名を^か命ける。しかし“こんな乞食”ならいつもしたいと思ううち『おい、袋』『おい、乞食』と右からも左からも声をかける。今年や乞食の当たり年。



大正元年12月26日の後円部の調査

黑板勝美が担当した“甲号”にあたる。白く丸く映るのは坏であり、坏の上には鉄製の刀子が載り、さらに鉄製の直刀が接している。また、切子玉（坏の奥の影になっている箇所）に白く光る小さな3点（点）が斜めになって出土した。

（写真は京都大学考古学研究室提供）

蓋物の傍にまた長剣一口、その他方には水晶玉（六角あるいは八角で圭角の取れたもの、中には外から朱が入って美しい）が6つ出た。それを撮影していると、すぐ傍で掘っていた（同じ姫塚のうち）今西学士が『出た出た、凄（すばら）しい物が出た』という。三浦先生もその方において、『出たのはいいが、毀（こわ）さんように』と例の奉行を發揮し、ここで黒板の方を甲号とし、今西の方を乙号とし、出たものを別の容器に入れることを定めたので、記録と製図（せわ）の忙しさ一方ならず。“乞食袋”も甲乙の2個となり、『おい、甲号の乞食』『おい、乙号の乞食』と呼ぶので『甲号の乞食』の時に『はい』と言って僕が行くのは、どうも『甲蔵の乞食』に聞こえるという人があったがどうか。

閑話休題として、さて、その乙号の方からは馬具の一部（鉄環）鉄片、円釘、長刀、ほかに香炉形の蓋の無くなった土器（今よく焼酎を沸かす黒ジョカの浅いような形）が1つ、それと無数の鍬（やじり）である。『どうもこの辺はヤジリが多いよ』と今西学士が言え『余りに野次（やじ）るべからず』と誰かが言って笑い出す。するとその辺にいる人が口々に野次りだしているいろいろ斬新なものを出したが、『宮内省部では、家を掘り出した』という報告に対して『家の瓦（か）だろう』と一人が言い『家の瓦の片（かけ）の一つだろう』と一人が言え『それでも家だといえはいえるだろう』とは知事様の傑作。

破（わ）るな、壊（く）すな（の）声が始終に聞こえる『破（わ）ったら百年目だぞ』と知事が言うと『千年目だ』と喜田博士が応じたのに対して『万年待ったとて分からぬようになるからね』はいよいよ出（い）ていよいよ振（ふ）るったが、一方また人夫が幾十人、その“前方”の方を掘っていたが、夕方（3時頃まで）に出たのは3尺2寸の直刀（ふり）を一口、他にまだこれというほどのものを見ぬ。…後略…』

（ここまで26日の調査の様子：『土中の日向（二）』日州新聞大正元年十二月二十八日記事より作成）

*

100年前の発掘、いかがだったでしょうか。

あ～でもない、こ～でもない言いつつ発掘する様子は、今と何も変わっていないかもしれませんね。

（藤木 聡）